

西丸震哉著『山だ 原始人だ 幽霊だ』

イヤハヤ、何とも人を喰った本である。

「あとがき」に曰く、「・・・この本の中には、十年以上も前の文章があるが、今でもそのまま通用する部分が多く、絶版ゆえに見たがる人が少くないから、再び日の目を見せる気になった。

・・・」。また、続編の「あとがき」では、「・・・値段の割に内容が少ないなどと言われたくないばかりに、1ページの行数を増やしてもらったり、あれもこれもといろんな話題を叩き込んだり、ずいぶんと出版社に勝手なことを言わせてもらっていたら、なんとギリギリになって前後編に二分しないとデザインが整わないという。前編と大きくうたうゆとりもなしに分けるのでは、前半分とは知らずに買った人にしてみれば、幽霊なんて章もないのだから、これはまるっきりサギじゃないかと言われそう。しかし内容は十分に盛り込んだつもりなので、まさか不足をいわれることなどあるまいと考える。値段もできるだけ安い線でおさえてくれるように、しつこいほど頼んだ結果だから、まあ何とか不満があるかもしれないけど、かんべんして下さいよ。云々カンヌン・・・」テナ具合。

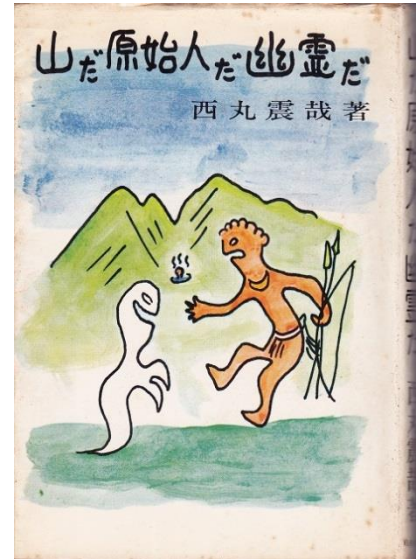
ハイハイ、成程、なるほど左様でゴザイますか。身の程弁えた著者なら、「・・・このような駄文で読者の皆様のお目を汚して、誠に恐縮の至りでございます・・・」とかなんとかと書くのがフツーではないかと思料イタシますが・・・。

さて、本書は、書名が示すとうり、「山」の風物に関する怪しい考察、「原始人」が聞いたら文明人という人種は何と愚かで間抜けた人種であることよと気の毒に思うであろうような「原始人に関する民俗考」、幽霊に関する風説的一論などがウンチクたらたらと書かれている。その内容は、例えば「山登りに酒は禁物か」、「人食い人種を食う話」、「呪い殺しの実験」や「雨やみの術」などがいかにもそれらしく描かれているが、マ、その殆どは怪しい大法螺の類であり、このことは書影の表紙の挿絵に如実に表されていると思ってもあながち間違いではなかろう。

マ、しかしながら、この大法螺的ウソッパチ論も、たとえ下ネタであろうとも、知性(?)とウンチクとユーモアと語り口というオブラートに包んで提示されると如何にもそれらしく聞こえ、馬鹿馬鹿しいのは百も承知の上でドンドンとハマッテしまつて抱腹絶倒になるから不思議なものではある。

マ、これが著者の真骨頂でもあろう。例えば、「山登りに酒は禁物か」の段では以下の如し。

「もし天国に酒が無くて、地獄の血ノ池茶屋では亡者見物しながら一杯やれるとしたら、私は死んだら地獄の方へ行こう。まず三途の川の渡し船で「船頭さん、ちょっと手を休めて一緒にやらかそうや。急ぐ旅じゃないんだから」で始まり、閻魔大王の前では「そのクギヌキ貸してくれないか。栓がヤケに固いんだ。ケチなこと言わないで貸せよお、おごったげるからさ。ナニ？ 舌なんか抜くなよ、味がわからなくなっちゃうじゃないか。アメリカの大統領だってスパイやったのやらないのってウソッパチ並べると時世だぜ。まともなことばかり言ったら面白味もなにもないやね。まあよけいなエネルギーは使わないことにしようや。赤鬼に出会ったら「よう、兄キ、いい色になってるな。針の山と一緒に登らないか？ 山のほうでアイゼンつけててくれるから、滑る心配がなくて安全だよ。まだ誰も登ってないコースはないかね？ なかなかハリ合いのある山じゃないの。頂上で乾杯といこうかあ」。青鬼に出くわしたら「どうだい？ 宿酔いだな。肝臓が悪いのと違うかね？ 迎え酒でもやってみたらどうだい」てな調子で地獄中をみんな手なづけちまおう、云々・・・」。



著者は、東京水産大山岳部の創立者だそうであるが、山のことは左程書き残していない。著書は沢山あるが、専らこの手の大道芸・啖呵譚である。農水省食品総合研究所の官能検査研究室長だったそうで、その仕事は人間の“舌”の感覚の研究だそうであるが、同じ“シタ”でも専ら下半身の官能の研究だったのではあるまいか。本書の中でも、あなたの職業は？と聞かれて「官能検査です。カンノーとは、官能的な美女というあれですよ」などというくだりも出てくるので、某民族における食品味覚の研究調査などと称して台湾やニューギニアに公費出張して専ら“カンノー”の研究に励んでいたのではあるまいか。マ、それはともかく、抱腹絶倒間違いなしだから、騙されたと思って一読されたら如何であろうか。

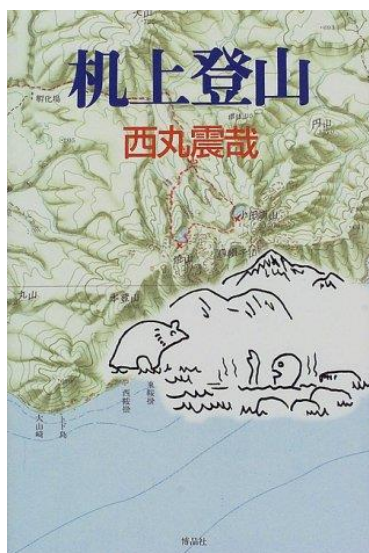
本書『山だ 原始人だ 幽霊だ』より少しはマジメに書かれている本に、[『机上登山』](#)や『西丸式山遊記』という著書もある。前者は、人知れずどこかに眠っている湿原や温泉の未踏の別天地を地形図から探し出して、北は択捉島から南は西表島まで日本全国の20ヶ所を地形図の等高線と地図記号だけを頼りに机上で徘徊してみるという目論みであり、そのキャッチフレーズに曰く「机上の空論ではなくて、珠玉の山行が絶対的に期待できるプランだと断言したい」と、ここでも大法螺を吹いている。

また、後者は、普通の登山とは一味違うスキー、未踏地探検、山中の温泉めぐりなどの山での遊び方や自然との付き合い方を伝授したものである。

『山だ原始人だ幽霊だ』（正、続）
経済往来社 昭和46年刊

『机上登山』
博品社 1998年刊

『西丸式山遊記』
角川選書 昭和61年刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)